

イエスの世界

古代ユダヤへのタイムトラベル 第1回

著＝ブルース・マリーナ ◆ 訳＝浅野幸治

解題

今月号から十二月号まで、ブルース・マリーナ著『イエスの世界——古代ユダヤへのタイムトラベル』から十二個のエピソードを選んで連載していきます。この書は、アメリカ人を読者として書かれた、新約聖書の比較文化論的な入門書です。まずエピソードの中で、現代アメリカ人が古代ユダヤ人とつき合い、異文化体験つまり古代ユダヤ人の行動について「一体何故なのか？」という体験をします。（私達が新約聖書を読む場合も、しばしば登場人物の行動について「はて？」と思う箇所があります。）そのような疑問に答えるべく、著者はエピソードの解説の部分で、現代アメリカと古代ユダヤの文化の違い、即ちものの見方の違いを説明してくれます。それは新約聖書の文化的背景の解説であり、読者が新約聖書を読む際の助けになることを狙いとしています。またこの書は実質的に古代ユダヤと現代アメリカの比較文化論になっていますが、古代ユダヤ文化が意外に日本の文化と似ていたりするので、日本文化についても教えられるところがあって興味深いと思います。

原著は、Bruce J. Malina の *Windows on the World of Jesus: Time Travel to Ancient Judea* で、アメリカのケンタッキー州ルーイビル市にある Westminster/John Knox Press から一九九三年に発行されています。著者は、ネブラスカ州オマハ市にあるクライトン大学神学部の教授で、*Social Science Commentary on the Synoptic Gospels* (Augsburg Fortress Publishers, 1992)、*The New Testament World: Insights from Cultural Anthropology* (Westminster/John Knox Press, 1993)、*Christian Origins and Cultural Anthropology: Practical Models for Biblical Interpretation* (Westminster/John Knox Press, 1993)、*On the Genre and Message of Revelation : Star Visions and Sky Journeys* (Hendrickson, 1995) などの著書があり、*Social Science Commentary on the Synoptic Gospels* は、邦訳が大貫隆氏の監訳で新教出版社から刊行の予定です。『イエスの世界』も新教出版社から刊行の予定で、訳者が現在準備中です。

(あさの・こうじ)

エピソード

父と息子

ホー・ダイドーという男がハンク・ウィルキンの家の近所に住んでいたが、そのホーがある朝、怒り狂っていた。そこでハンクは近づいて行って、一体どうしたのかと聞いた。

するとホーは言った。「昨日のことだ、野良仕事はまだいくら残ってるものだから、そいつを片づけてしまうのを手伝わせようと思って、せがれ等を探しに村まで行ってきたんだよ。そうすると村の広場は大変な人出だったんだけど、そこでせがれ等を見つけて、わしは作業を片づけるのを手伝いにくるようにと言った。ところがせがれ等は、今は近所の人の子の屋根を葺いていて忙しいから、明日か明後日になったら手伝いに行くと言いやがったんだ。」息子たちの返事はもっともだと思えたので、ハンクはどうしてホーがそんなにひどく怒っているのか解らなかった。

何故、ホーはそんなに怒り狂っていたのか。

エピソードの解説

イエスは反抗的な息子だったか

ホーが怒っていたのは、息子たちに人前で面子を傷つけられたからである。地中海社会の場合、その中心にある制度は親族関係であり、父親であるということは社会の階層構造の中での一定の地位を意味する。父親が子供に何かをするようにと言って子供がその通りにした場合、その子供は父親を父親として尊重している。それを見て他人も、その父親が立派な父親であることを認める。しかし、父親が何かをするようにと言っているのに、子供がそれを後回しにしたり言うことを聞かない場合、その子供は父親の面子をつぶすことになる。そうすると父親の仲間は、その父親のことをお笑い草だと感じ、暗黙の内にその父親が父親としての面子を欠いていることを公認するのである。

地中海地域以外に住む人は、面子はそれぞれの共同体によって異なるからという理由で、面子は中心的な価値ではないと主張することが間々ある。しかし、まず最初に注意しておくべきことは、面子とはある種の行為や社会的役割のことではない

ということである。正しくは、面子とは価値である。そして様々な共同体によって異なるのは、行為や役割の評価の仕方である。即ち、共同体が異なれば、非常に異なった行動が立派な行動として評価されることがある。例えば、泥棒の一団が何を価値あることと見なすか、また商人の集まりが何を立派なことと考えるか、を想像してみればよい。にもかかわらず、地中海地域のすべての人が自らの面子を主張する。

更にアメリカ人は、地中海地域の人が予想外の経済的出費で腹を立てることはまずないということを知る必要がある。この一番最初のエピソードに関してアメリカ人は、ダイドーが腹を立てたのは野良仕事には好天が不可欠であるのに雨が降る可能性があったから、つまり息子たちはすぐに作業を手伝いに行くべきだったからだ、と思うかもしれない。しかし実際には、たとえ仮に野良仕事が遅れて経済的損失になったとしても、そのことでダイドーが腹を立てることはないのである。金銭に価値が認められるのはそれが面子を生むからであり、面子に変換できない金銭は社会的にはあまり役に立たない。

イスラエルの伝統の中には、父（または母）に恥をかかせた息子に対して非常に厳しい教えがあった。申命記の律法は、次のように規定している。

ある人にわがままで、反抗する息子がおり、父の言うことも母の言うことも聞かず、戒めても聞き従わないならば、両親は彼を取り押さえ、その地域の城門にいる町の長老のもとに突き出して、町の長老に、「わたしたちのこの息子はわがままで、反抗し、わたしたちの言うことを聞きません。放蕩にふけり、大酒飲みです」と言いなさい。町の住民は皆で石を投げつけて彼を殺す。あなたはこうして、あなたの中から悪を取り除かねばならない。全イスラエルはこのことを聞いて、恐れを抱くであろう。（申命記 21・18-21）

これは、わがままで言うことを聞かない息子は「放蕩で大酒飲み」のようなものだということを意味する。「放蕩」と「大酒飲み」はどちらも社会的に非難されることであり、これらの否定的特質は一家の面子の社会的評価を失墜させる。そして子供に現れた特質は良いものも悪いものもすべて、ことわざ通り親に帰せられる。というのも面子は、出生の事実由来からである（「この母にしてこの娘あり」（エゼキエル16・44）、この父にしてこの子あり（マタイ11・27）。申命記

23・2、列王記下9・22、イザヤ57・3、ホセア1・2、シラ23・25-26、30・7も参照)。立派な家には立派な先祖の品格、先祖が獲得し蓄積してきた品位があるので、立派な家に生まれた人は立派な人間である。聖書が家系を記述するのは、人の有する面子（品位）の系譜を辿ることを主要な狙いとしている。それは人が伝統的な地位階層の中で有する地位は、その人の家系によって定まるからであり、人に認められた面子は、その人の家系によって強調されるのである（マタイ1・2-16、ルカ3・23-38。マルコ6・3、マタイ13・54-57、ルカ4・22、ヨハネ7・40-42におけるイエスの家と出自に関する問題も同じことを狙いとしている。パウロについては、ローマ書11・1、フィリピ書3・5を参照）。

そうであるから、もしわがままで言うことを聞かない息子がいれば（不良娘の場合と同様に）、その家の立派な家としての威信に大きな疑いがかかる。そのような子供は、公衆の面前で言われたことに従わないことによって親の面子を傷つけるのである。

父ダビデに対するアブサロムの行動は、今のエピソードに照らして理解する必要がある（サムエル記下13-18を参照）。

もちろん、イエスが神の意志を行う者こそ自分の真の兄弟、姉妹、母親であると主張する時、イエスの面子も家の面子も疑わしいものになる（マルコ3・31、マタイ12・46-50、ルカ8・19-21）。更に福音書の伝承は、イエスがしばしば「徴税人や罪人」と一緒に食事をしたと語り（マルコ2・15-16、マタイ9・10-11、ルカ5・30、15・1）、それと並んでイエスがおまけに「大食漢で大酒飲み」だと非難されたことを伝える（マタイ11・19、ルカ7・34）。これは明らかに、素直な息子が家の面子を立てるのは正反対の行動である。上に引用した申命記21・18-21の律法は、わがままで言うことを聞かない息子イエスには当てはまらないのであろうか。イエスの恥知らずな行動は、一体どういう理由で許されうるのであろうか。

恥と面子の社会的コードにおいては、この種の行動が容認され賞賛もされうるのは、イエスがより高い、社会的な非難を受けえない地位にあった場合だけである。というのは、より高い地位の人は普通の人を義務を超越しているからであり、普通の人にはより高い地位の人の働きが知りえないのである。このことを理解して福音書の物語を読めば、イエスがそのような地位の方であることを示唆するヒントは与えられている。即ちイエスが洗礼を受けた時に、イエスは神の「心に適う者」であると語る声が空から聞こえたこと（マルコ1・11、マタイ3・17、ルカ3・22）、

またイエスが姿を変えた時に「これに聞け」と語る声が空から聞こえたことである
(マルコ9・7、マタイ17・5、ルカ9・35)。

イエスの世界

古代ユダヤへのタイムトラベル 第2回

著＝ブルース・マリーナ ◆ 訳＝浅野幸治

エピソード

乱暴な神殿守衛

ウォリー・ワグナーが人込みをかき分けながらエルサレムの市場を通っていると、一人の商人が自分の売り物に太鼓判を捺して言った。「これは最高級の布地だよ、エルサレムにかけて誓ってもいい。」商人が誓いを口にしたちょうどその時、神殿守衛が近くを歩いている、いきなり商人の頭を棒で殴りつけた。それから二人の間で激しい言い合いが始まった。ウォリーは、この突然の暴力沙汰に全く啞然としてしまった。

何故、守衛は商人に暴力を振るったのか。

エピソードの解説

誓い、冒瀆、尊厳

神殿守衛は、商人が自分の売り物の品質保証人として神を立て、そうすることによって神の尊厳（面子）を貶めていると思ったのである。何よりも面子が重要な社会で生まれ育った人間にとっては、自分の社会の階層秩序の中で極めて上位に位置する人の尊厳（面子）を守るべき義務があることは自明の理である。イスラエルの家の人間にとってそのような上位の方とは、神、王と王室、大祭司とその家族、庇護者たる各地の貴族などである。そのような方は社会的地位が余りにも高く、普通の人間が異議を唱えたり泥を塗ったりできるような存在ではないのである。また、社会の全員から完全にないがしろにされた場合を除いて、自分で自分の尊厳を守ったりなどしない。通常は、社会的に上位の方の尊厳（面子）を守るのは善良な市民の役目であり、神こそは上位の方の中でも最も高き方である。

言葉による侮辱（冒瀆）に対して神の尊厳（面子）を守ることは、他の善良な市民もそれを支持し神の尊厳（面子）を守った人に大きな榮譽を認めてくれるから、自分自身の面子を上げることにもなる。

地中海世界は、ウチとソトの世界である。そのような社会環境の中に生きる人は、ソトの人間に対しては嘘をついたり騙したりしてもまったく構わないし、罪にならないと考える。それどころか褒むべき行為なのである。では、何かを売買する場合のように正直さが求められる場面ではどうなるであろうか。誓い、つまり法律外の宣誓が登場するのが、この場面である。そのような誓い（例えば商売での「このロバが健康なことは神に誓う」）は、曖昧さを無くし自分の真の意図を明瞭にすることが目的である。誓いと共に、ある種の暗黙の呪いがかけられる（例えば、もしロバが病気で死んだら、虚偽の証人として神様を立ててその尊厳を穢した私には、神罰をお与え下さい）。そしてもし誰かが誓いを立てることを拒否した場合、世間はその人を恥ずべき人間と見なす。（民数記5・11-31にある不倫の疑いをかけられた妻に関する律法を参照。またルカ1・73、使徒行伝2・30、23・12, 14-21、ヘブライ書7・20-28も参照。）山上の垂訓の中には、そのような商売上の誓いに対するイエスの批判が、昔の律法と対比して次のように述べられている。

また、あなたがたも聞いているとおり、昔の人は、「偽りの誓いを立てるな。主に対して誓ったことは、必ず果たせ」と命じられている。しかし、わたしは言うておく。一切誓いを立ててはならない。天にかけて誓ってはならない。そこは神の玉座である。地にかけて誓ってはならない。そこは神の足台である。エルサレムにかけて誓ってはならない。そこは大王の都である。また、あなたの頭にかけて誓ってはならない。髪の毛一本すら、あなたは白くも黒くもできないからである。あなたがたは、「然り、然り」「否、否」と言いなさい。それ以上のことは、悪い者から出るのである。（マタイ5・33-37）

ここでの教えは、宣伝の正直さに関わり、特に神が宣伝の共同スポンサーとして立てられる場合について語っている。もし誰かが別の人に何かを誓った場合、その後面子を失うるのは相手の人間ではなく誓いを立てた人間だけである。しかし、誓いを立てる人が神を証人として立てた場合、もしその人が嘘をついたり騙していたりすれば、神の尊厳が穢されることになる。

マタイ福音書の中で上のように言う時、暴力こそ振るわないが、イエスも神の尊厳を守るために出てきたあの神殿守衛と同じことをしているのである。

(あさの・こうじ)

イエスの世界

古代ユダヤへのタイムトラベル 第3回

著=ブルース・マリーナ ◆ 訳=浅野幸治

エピソード

感情はあらわにし、考えは隠しておく？

一世紀のパレスチナの人モッシュ・ベン・バルバは、これまで多くのアメリカ人と会ったことがあり、親しい付き合いのアメリカ人も少なくなかった。ある日のこと、ユダヤ人とアメリカ人と両方の集まったパーティでモッシュは、ユダヤ人とアメリカ人では主にどこが違うと思うか、と尋ねられた。この質問にモッシュは、ユダヤ人は心はさらけだして頭に鍵をかけておくのに対して、アメリカ人はその反対だと答えて、ほとんどのパーティ客をうならせた。

モッシュの譬えは、どういう意味か。

エピソードの解説

イエスが感情的な人であるわけ

地中海地域の人、アメリカ人よりもおおっぴらに感情を表す。またしばしばアメリカ人は自分の感情を正当化したり説明したりしなければならないと感じるが、地中海地域の人、ユダヤ人も感情や行為の自然な表れを尊重し、感情をおおっぴらに表す。それに対してアメリカ人は、自制心を尊重するため（北欧文化の遺産）また感情を外に出すことが子供っぽいことだと考えられるために、感情表現を控える傾向がある。但しこれは、すべてのアメリカ人が控えめでありユダヤ人には全く自制心がないという意味ではない。感情表現の多寡は、地中海文化とアメリカ文化それぞれに見られる最も顕著な傾向というに過ぎず、その例外もあるからである。

感情を示すことは、古代の地中海世界では立派な男のしるしである。例えばカエサルは、亡くなった若妻を偲ぶ追悼演説を行って一般大衆の心を捉え（普通、女性への追悼演説は年配の婦人にしか行われなかった）、カエサルの行為は異例のことであった）、「優しい情の厚い性格の人として愛されることになった」と言われ

ている（プルタルコス『英雄伝』カエサル第5節2）。カエサルはまた、アレクサンドロスが若くして王であったことを書物で読んだ時、それと自らを比較して泣き出したし（同書カエサル第11節3）、自分の不倶戴天の敵ポンペイウスが亡くなった時には涙を流した（同書カエサル第48節2）。同様に、「これ（ポンペイウスの案）に賛意を表したのはカトーだけであり、それは市民同士の闘いを避けたいという気持ちからであった。実のところ、戦闘で斃れた敵がその数千に達するのを見てさえ、カトーは顔を覆い泣きながら立ち去ったほどなのである」（同書カエサル第41節1）。最後に、キケロが弟と別れる時、二人は「互いに抱き合っただけで涙ながらに別れを告げた」（プルタルコス『英雄伝』キケロ第47節2）。

詩を作ったり読んだりするのも男性である（聖書の中の詩に加えて例えば、アレクサンドロス大王がしばしば詩の競技会を催したというプルタルコス『英雄伝』アレクサンドロス第4節6および第29節1の記述を参照）。男性は、論理的であることはそれほど期待されていない。男は人前で抱き合いキスし合うし（マタイ26・48およびそれと対応する他の福音書の箇所、ルカ7・45、使徒行伝20・37、ローマ書16・16、その他）、お互いの愛情についても語る（フィリピ書1・8、キリスト者のお互いへの愛情を促すエフェソ書4・32、フィリピ書2・1、ペトロ前書3・8）。それに対し女性は、冷静で実際的なだけの人間と見なされている（箴言31・10-30を参照）。

ヘロデ（マタイ2・16）、イエスの故郷ナザレの人々（ルカ4・28）、ヤコブとヨハネに対する十人の使徒（マタイ20・24）、祭司長や律法学者（マタイ21・15）、そしてイエス自身（マルコ10・14）も憤ったこと、即ち何らかの理由で不快感を表し感情的になったことが書かれている。パウロのガラテア人への手紙もこのパターンに属す。

マタイとマルコの福音書は、イエスが、導き手のいない群衆（マタイ9・36）、群衆（マルコ6・34、マタイ9・36）、お腹を空かせた人々（マルコ8・2、マタイ15・32）、二人の盲人（マタイ20・34。マルコ9・22は少し異なっている）など困っている人を憐れんだ話をいくつも伝えている。ルカにも、イエスがナインの町でやもめに会った時のことについて同様の記述がある（ルカ7・13）。

最後に、このエピソードで説明した地中海文化の特徴は、ラザロの死にイエスが涙を流す次の有名な一節にふんだんに見られる。

イエスはまだ村には入らず、マルタが出迎えた場所におられた。家の中でマリアと一緒にいて、慰めていたユダヤ人たちは、彼女が急に立ち上がって出て行くのを見て、墓に泣きに行くのだろうと思い、後を追った。マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧下さい」と言った。イエスは涙を流された。ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。（ヨハネ11・30-36）

（あさの・こうじ）

イエスの世界

古代ユダヤへのタイムトラベル 第4回

著＝ブルース・マリーナ ◆ 訳＝浅野幸治

エピソード

友に対する責任感

レストンは一世紀のパレスチナに長年住んでいて、親しいつき合いのあるユダヤ人家族も多かった。ある日レストンは、自分が開いたパーティの席で、次の日曜日に新しい家に引っ越しすること、引っ越しの作業が煩わしいことなどを二、三のユダヤ人の友達にもらした。すると驚いたことに、日曜の朝、大勢のユダヤ人の友達がレストンの引っ越しを手伝いにきてくれたのである。

何故、ユダヤ人の友達は大挙してレストンを手伝いにきてくれたのか。

エピソードの解説

キリスト教内部の助け合い

レストンは内輪の仲間を獲得していて、仲間たちはレストンの引っ越しを手伝う必要があると感じたのである。レストンは一世紀のパレスチナに比較的長く滞在していたので、非常に深い仲間を獲得することができた。そして内輪の仲間は、お互いのために一肌も二肌も脱ぐことが期待される。レストンの友達が引っ越しの手伝いに来てくれたのもそのためである。

内輪の仲間（隣人や友達）は、お互いに助け合う必要を感じる。この点に関しては、二世紀の作家ルキアノスが『ペレグリノスの昇天』と題する作品の中で述べている、キリスト者の間で見られた隣人にふさわしい行動も参考になる（第12節～第13節）（注）。『ペレグリノスの昇天』の最初の方の部分から、シリアのペレグリノスは、放浪哲学者のように振る舞う人格が疑わしい人間であったことが解る。しかし、ペレグリノスはパレスチナにいた時にキリスト教になりそのため後に投獄されるのであるが、ルキアノスは次のように述べている。

ペレグリノスが捕らえられた時、キリスト教徒はその事柄を禍と考え、ペ

レグリノスを救出しようとあらゆる努力をした。そして救出が不可能とわかると、ペレグリノスに対してお座なりな仕方ではなく精魂込めて出来る限りのあらゆる配慮を示した。夜が明けるとともに年老いた寡婦や孤児が牢獄の外で待機しているのが見られたし、更に教会の役職者は牢番を買収してペレグリノスとともに牢獄の中で寝た。それから手のこんだ食事を持ち込み、聖書を朗読し、有徳のペレグリノス——彼はいまだにこのように呼ばれていた——を「現代のソクラテス」と讃えた。

実際キリスト教徒は、小アジアの町からも信徒の共同出費で派遣されて、この男を援助し弁護し激励するためにやってきた。そのように何かを共同で行う時にキリスト教徒は信じ難い程すばやかだったが、それは直ちに一切を捧げるからである。ペレグリノスの場合にもそうで、多くの金銭がキリスト教徒から獄中に送られ、ペレグリノスはそれで大変な収入を得た。というのは、あわれにもキリスト教徒は自分達が完全に不死となり永遠の生を得ることを堅く信じているので、大部分の者は死を軽んじ、自ら進んで身を捧げるのである。その上最初の立法者（イエス）に説得されて、一度法を犯してギリシアの神を否認し、あの十字架にかけられた詐欺師自身を崇め、イエスの法に従って生きる以上は皆お互いに兄弟であると信じている。それだからキリスト教徒はあらゆるものを一様に軽んじ共同財産と見なすが、そのような教えは単に伝承によって受け取ったものであり何の確かな証拠もない。

(注) 『ペレグリノスの昇天 (The Passing of Peregrinus)』の邦訳は、ルーキアーノス (高津春繁訳) 『遊女の対話 他二篇』岩波文庫、昭和三十六年の中に含まれている。『ペレグリノスの昇天』からの引用は、高津訳およびマーリーナが使っている英訳を参考にしてギリシア語から訳した。

(あさの・こうじ)

イエスの世界

古代ユダヤへのタイムトラベル 第5回

著＝ブルース・マリーナ ◆ 訳＝浅野幸治

エピソード

母と息子

ウォルト・ドナーは、地中海のユダヤ人の友人もアメリカ人の友人もやってくる、エルサレムでのパーティに出かけた。パーティの途中で、ウォルトはユダヤ人で奥さんを連れて来ていない友人がいるのに気付いたので、その友人に奥さんは元気でいらっしゃいますかと尋ねた。友人は、女房は大いに元気だが長男が試験勉強を怠けることがないように家に残ったのです、と答えた。ウォルトは、十三才の少年が勉強をするのに母親が側に付いている必要があるというのは非常に奇妙だと感じたが、それ以上は何も尋ねなかった。

何故、息子に試験勉強させるために母親は家に残ったのか。

エピソードの解説

母と息子——マリアとイエス

地中海のユダヤ人の場合、母親は息子に対して過保護の傾向がある。結婚し子供を産む女性の運命は息子との関係に依存するし、母親という社会的地位にとって息子は不可欠である。更に、家の社会的評価も親の社会的保障もすべて息子の成功と密接に結びついており、息子は生涯父親の家またはその近くに住むことが求められる。かくして地中海地域の母親は、息子に対して過保護な性格になっている。今のエピソードで母親が息子と家に残ったのも、母親の過保護的教育ママの性格の一つの現れに過ぎない。

聖書の時代でも母親は、息子が男の世界に入っていくまで息子の教育の責任を担っていた。エルサレムに旅をした時、マリアは母親として、少年のイエスに一体何をしていたのかと質問しているが（ルカ2・48）、これはイエスがまだ完全には男の世界に入っていないことを示すものである。長男——「母のもとでは、いとけない独り子」（箴言4・3）——はしばしば寵愛を受けたし、息子が子供の間に、

母親は息子に伝統的な知恵を教えた（例えば箴言31に「マサの王レムエルが母から受けた諭しの言葉」がある——レムエルは母が誓いの故に授かった息子である（箴言31・2））。

母親の役目は息子を知恵ある子に育てることであった。「愚かな子は母の嘆き」（箴言10・1）であり、「愚か者は母を侮る」（箴言15・20）からであり、「父に暴力を振るい、母を追い出す者は、辱めと嘲りをもたらず子」（箴言19・26）だからである。そして「懲らしめの杖は知恵を与える。放任されていた子は母の恥となる」（箴言29・15）とあるように、知恵を教え込む通常の方法は体罰であった。

箴言には、反抗的な息子に対する神の制裁が述べられている。

父母を呪う者

彼の灯は闇のただ中で消える。（箴言20・20）

父を嘲笑い、母への従順を侮る者の目は

谷の鳥がえぐり出し、鷲の雛がついばむ。（箴言30・17）

親に反抗的な息子を処刑する権利を認めている点で、申命記は更に厳しい。

ある人にわがままで、反抗する息子がおり、父の言うことも母の言うことも聞かず、戒めても聞き従わないならば、両親は彼を取り押さえ、その地域の城門にいる町の長老のもとに突き出して、町の長老に、「わたしたちのこの息子はわがままで、反抗し、わたしたちの言うことを聞きません。放蕩にふけり、大酒飲みです」と言いなさい。町の住民は皆で石を投げつけて彼を殺す。あなたはこうして、あなたの中から悪を取り除かねばならない。全イスラエルはこのことを聞いて、恐れを抱くであろう。（申命記21・18-21）

最終的に問題になるのは、父親とその一部としての母親の面子、即ち伝統的な家の面子である。従って、「「父母を軽んずる者は、呪われる。」民は皆、「アメン」と言わねばならない。」（申命記27・16）

母親は社会的に父親の一部であったので、シラは、父親に焦点を当てて、エリート達が尊重した伝統的な価値を明瞭に述べている。

主は、子に対する権威を父に授け、
子が母の判断に従う義務を定めておられる。
父を尊べば、お前の罪は償われ、
同じく、母を敬えば、富を蓄える。
父を尊べば、いつの日か、

子供たちがお前を幸せにしてくれる。

主は、必ず祈りを聞き入れてくださる。
父を敬う者は、長寿に恵まれ、
主に従う者は、母を安心させる。

〔主を畏れる人は、父を尊び、〕

僕が主人に仕えるように、両親に仕える。
言葉と行いをもって、父を尊敬せよ。
そうすれば、父から祝福を受ける。
父の祝福は、子供たちの家を堅固なものとし、
母の呪いは、子供たちの家の土台を覆す。
父の名誉を傷つけてまで、

自分の栄誉を求めな。

父の不名誉は、お前の栄誉とはならない。
父親を敬うこと、これこそ人間の栄誉なのだ。
母親を侮ること、それは子供にとって恥である。
子よ、年老いた父親の面倒を見よ。
生きている間、彼を悲しませてはならない。
たとえ彼の物覚えが鈍くなっても、
思いやりの気持ちを持て。

自分が活力にあふれているからといって、
彼を軽蔑してはならない。

主は、父親に対するお前の心遣いを忘れず、
罪を取り消し、お前を更に高めてくださる。
お前が苦難に遭うとき、

主は、その心遣いを思い出してくださる。

お前の罪は、晴れた日の霜のように
解け去るであろう。

父を見捨てる者は、神を冒瀆する者、同じく
母を怒らせる者は、主に呪われている者。(シラ3・2-16)

息子がいなければ、女性は十分な意味で人として認めてもらうことが期待できない。従って、母親は文字通り息子に結びついており、お互いがお互いの一部であるような運命共同体になっている。これは単に個人と個人の関係ではなく、母の息子に対する関係は多くの場合、愛着が非常に強く、アメリカ人が愛と呼ぶものに一番近い。そういうわけで、シラは次のように述べている。

孤児たちに対しては父親のようになり、
孤児たちの母親に対しては、
その夫がするように手助けするがよい。
そうすれば、いと高き方はお前を子と見なし、
母親以上にお前を愛してくださる。(シラ4・10)

父と母は、尊敬せねばならない。尊敬とは、両親が計り知れない程ありがたいものであることを、言葉と行為(手を貸すことや物質的援助)によって示すことである。何故か。息子は、両親に対して返しきれない恩、つまり義理があるからである。この義理は、ヘブライ語で「ヘセド」ギリシア語で「エレオス」と呼ばれ、英語では「慈しみ (loving-kindness)」または「憐れみ (mercy)」である。この義理があるのは何故か。

心を尽くして父を敬い、
また、母の産みの苦しみを忘れてはならない。
両親のお陰で今のお前があることを銘記せよ。
お前は両親にどんな恩返しができるのか。(シラ7・27-28)

イエスの世界

古代ユダヤへのタイムトラベル 第6回

著=ブルース・マリーナ ◆ 訳=浅野幸治

エピソード

甘やかされたアメリカ人の子供

五歳になるアメリカ人の子供が、両親に連れられて一世紀のパレスチナにやってきた。その子は、二、三日の間パレスチナのユダヤ人祖父母の家に泊まることになった。その子が泊まった最初の朝、おばあさんは卵を料理してその子に持っていった。

しかしその男の子は、それほど卵は欲しくなかったしお腹も空いていなかったの
で、卵はいらないと言った。おばあさんは何回も卵を食べるように言ったが、男の子はうんと言わなかった。とうとう男の子は、「もし卵を食べるのがそんなに大事
なんだったら、おばあさんが食べたらいいいじゃない」と言った。おばあさんは、甘
やかされて感謝することを知らない子だと言って、男の子を母親のところへ返して
しまった。

一体何が、子供を母親のところに戻さねばならない程おばあさんの気に障っ
たのか。

エピソードの解説

神様からの授かり物には報いなければならない

一世紀のパレスチナでは、いつ誰からということに関係なく、差し出された食べ
物を受け取らないのは失礼なことである。しかしこれだけでは上のエピソードは説
明されない。男の子はおばあさんの親切な心遣いに対して、然るべき感謝の気持ち
を表さなかった。卵はおばあさんの心遣いの現われであるのに、男の子はそれを受
け取らなかった。そのことが、おばあさんを怒らせたのである。男の子はたとえ食
べる気がなくても、卵を受け取った方が賢明であった。卵を受け取らなかったこと
は地中海ユダヤ人のもの見方からすれば確かに感謝知らずの行為であり、差し出
されたものは人の気持ちを尊重してすなおに頂くことを、両親は子供に教えておく

べきだったのである。しかし、それ以外の振る舞い方についても見てみよう。

通常贈り物はどんな種類のものでも、贈ってくれた人の心遣いの現われである。もし贈り物を受け取らなければ、たいていは贈ってくれた人を怒らせるであろう。だから贈られた物はいつでも、たとえ捨ててしまう積もりの場合でも、受け取らないよりは受け取る方がよい。贈り物を受け取らないことは、地中海ユダヤ人のもの見方からすれば感謝知らずの行為だからである。しかし反対に、贈り手に対する強い不快感を示すために、贈られた物を受け取らないこともある。

彼らが断食しても、わたしは彼らの叫びを聞かない。彼らが焼き尽くす献げ物や穀物の献げ物をささげても、わたしは喜ばない。わたしは剣と、飢饉と、疫病によって、彼らを滅ぼし尽くす。(エレミヤ14・12)

あなたたちのうちの誰か、わが祭壇に
いたずらに火が点じられることがないように
戸を閉じる者はいないのか。
わたしはあなたたちを喜ぶことはできないと
万軍の主は言われる
わたしは献げ物をあなたたちの手から
受け入れはしない。

日の出る所から日の入る所まで、諸国の間でわが名はあがめられ、至るところでわが名のために香がたかれ、清い献げ物がささげられている。わが名は諸国の間であがめられているからだ、と万軍の主は言われる。それなのに、あなたたちは主の食卓は汚されてもよい、その食卓の果実は食物として軽んじられてもよいと言って、御名を冒瀆している。また、なんと煩わしいことかと言って、わたしをさげすんでいる、と万軍の主は言われる。あなたたちが盗んできた動物、足の傷ついた動物、病気の動物などを献げ物として携えてきているのに、わたしはあなたたちの手からそれを快く受け入れうるだろうか、と主は言われる。(マラキ1・10-13)

「供え物をわたしに献げても、わたしは顔を背けよう。わたしは、お前たちの祝祭日と新月と割礼を拒んだ。わたしは、わが僕、預言者たちを、お前たちのもとに遣わしたが、お前たちは彼らを迎えて殺し、その体を切り刻んだ。わたしは彼らの血について復讐する。」これは主の言葉。(2エズラ1・31-32)

また、贈り物を受け取りながら用いないということもありえる。

「わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます。神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません。」（二コリント6・1）

パウロも、贈り物には報いなければならないという考えであった。あらゆる農民社会の場合と同様に、古代の地中海社会では物資に限りがあった。そのような社会では余剰物資は存在せず、土地そのものを始めとしてあらゆる物資が既に分配されている。だから、誰かが何かをより多く持っていれば、必然的に別の誰かがその分だけ失っているのである。そのような社会状況にあつては、当然人々は如何なる物も無駄にしない。贈り物をする場合には、後でお返ししてもらうことを考える。従って贈り物には必ず、何らかの仕方でお返しをしなければならない。例えば、パウロはヨブ記41・3を引用しながら「だれがまず主に与えて、その報いを受けるであろうか」（ローマ11・35）と述べているが、そこでは明らかに贈り物には必ずお返しがつきものだという考えが前提されている。それは、伝統的な地中海文化の考え方であつて、神からの授かり物の場合にも当てはまる。そして、贈り物に報いなければならないことは誰でも知っているので、神からの授かり物について語ることは、キリスト者に神への恩返しを勧めることになる（「恵み」と訳されている言葉はキリスト者に対する神からの応援や好意というある種の贈り物を指す言葉であることに注意）。

この奉仕の業が実際に行われた結果として、彼らは、あなたがたがキリストの福音を従順に公言していること、また、自分たちや他のすべての人々に惜しまず施しを分けてくれることで、神をほめたたえます。更に、彼らはあなたがたに与えられた神のこの上なくすばらしい恵みを見て、あなたがたを慕い、あなたがたのために祈るのです。言葉では言い尽くせない贈り物について神に感謝します。（二コリント9・13-15）

事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。それは、だれも誇ることがないためなのです。（エフェソ2・8-9）

体は一つ、霊は一つです。それは、あなたがたが、一つの希望にあずかるようにと招かれているのと同じです。主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ、すべてのものの父である神は唯一であって、すべてのものの上におられ、すべてのものを通して働き、すべてのもののおられます。しかし、わたしたち一人一人に、キリストの賜物のはかりに従って、恵みが与えられています。（エフェソ4・4-7）

あなたがたはそれぞれ、賜物に授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。（一ペトロ4・10）

（あさの・こうじ）

イエスの世界

古代ユダヤへのタイムトラベル 第7回

著＝ブルース・マリーナ ◆ 訳＝浅野幸治

エピソード

知らざる事なし

ハワード・ストールは、セツフォリス郊外にある農業用機械工場で指導員として働いていた。ハワードの部下にはジョースという古株の男がいたが、ある日ハワードはジョースが与えられた指示を守っていないのに気が付いた。実際ジョースは、ハワードが赴任してくる以前の古い方法で作業をしていたのである。ハワードは、自分が工場みんなに新しい作業方法を教えたのにジョースはそれを守っていないと言って非難した。するとジョースはすごく怒って、自分は作業の内容がよく解っていると言い、新しい方法のどこに問題があるかをいちいち指摘し始めた。

ジョースの批判は実際には完全に的外れなものであったが、にも拘わらずジョースは工場内の全員に聞こえるように大声でハワードに怒鳴り散らした。ハワードはいささか面食らってしまった。

何故、ジョースはそんなに怒ったのか。

エピソードの解説

人の面子を傷つける者は跳ね返される

一般的に言って地中海のユダヤ人は、自分の仕事ぶりが検査されたり批判されたりするのをアメリカ人よりも遥かに嫌う。ジョースの作業方法を検査・批判した時、ハワードは（それと知らずに）ジョースの地位を貶めていたのである。地中海ユダヤ人は、地位の違いに関してアメリカ人よりも敏感なきらいがあり、自分の地位が誰かによって否定された場合、否定した人に対して非常な敵対心を抱くことが多い。ジョースが的外れな批判をしたのも、もちろん敵対心の現われであり、ハワードの地位を下げようとしてのことである。即ち、的外れな批判を大声ですることによって、ジョースは同僚（内輪の者）に、ハワードがソトの人間であることを伝えようとしていたのである。

この点が理解されれば、福音書の物語の中で人々が（特にユダヤで）イエスを批判する時、それが内輪の仲間を味方に引き込むことを狙ったものであることは明らかであろう。それはイエスが敵を批判する場合も同様である。福音書の中には、イエスが律法の専門家に「～を読んだことがないのか」という辛辣な質問をする多くの場面が多くある（マタイ12・3、12・5、19・4、22・31、マルコ12・10、12・26、ルカ6・3）。そのような問いかけは、人の役割の否定（律法の専門家は「～を読んだことがある」に決まっている）をその人自身とは切り離して考えない。人の役割と人格とを同一視して、それを今の場合無能だとか邪悪だとか見ているのである。

そこで次に、義兄弟婚（レビラト）と復活についてのサドカイ派のふざけた質問に対して、イエスがどう答えたかを見てみよう（マルコ12・18-27）。

復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエスのところに来て尋ねた。「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が死に、妻を後に残して子がない場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、跡継ぎを残さずに死にました。次男がその女を妻にしましたが、跡継ぎを残さずに死に、三男も同様でした。こうして、七人とも跡継ぎを残しませんでした。最後にその女も死にました。復活の時、彼らが復活すると、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」

イエスは言われた。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。死者の中から復活する時には、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。死者が復活することについては、モーセの書の『柴』の箇所、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなたたちは大変な思い違いをしている。」

注意してもらいたいのは、「あなたたちは思い違いをしている」というはっきりした非難の言葉がイエスの答えの始めと終わりに述べられる点である。更にサドカイ派は、聖書も神の力も知らないと露骨に言われている。またイエスがこのように批判しているサドカイ派は神殿を管理しイスラエルの人々を指導する公的立場に

あった人達であることにも注意すべきである。だからサドカイ派の人達は、職務能力だけではなく信用や人格そのものまでもがどうしようもなく不十分と見なされているのである。

もう一つの戦略としては、攻撃の手を相手に向け返して、相手自身がほぼ同じ事を行っているのを指摘する方法がある。「わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出すのなら、あなたたちの仲間は何の力で追い出すのか。だから、彼ら自身があなたたちを裁く者となる。」（マタイ12・27、ルカ11・19）

パウロも同様な戦略を用いて自らを敵と区別するが、そうすることによってパウロは人々を自分の側に引き込むことを狙っている。キリスト者に割礼を迫る人達に反論する中で、パウロは「あなたがたをかき乱す者たちは、いつそのこと自らを不具にすればよい」（ガラテヤ5・12）と鋭く主張している。「自らを不具にする」という表現はかなり婉曲的であるが、それは単に包皮だけではなく完全に「去勢する」という意味である。地中海社会において男性を表す第一の象徴の重要性を考えれば、パウロの主張は、内輪の仲間を引き寄せるのに十分な役割を果たしたであろう。パウロはフィリピの信徒への手紙の中でも「あの犬どもに注意しなさい。よこしまな働き手たちに気をつけなさい。切り傷にすぎない割礼を持つ者たちを警戒しなさい」（フィリピ3・2）と、ここでは割礼を「切り傷」と呼んで同様な戦略を取っている。

このように、人の言動を批判することによってその人自身をよそ者として排除する例は数多くある。

（あさの・こうじ）

イエスの世界

古代ユダヤへのタイムトラベル 第8回

著＝ブルース・マリーナ ◆ 訳＝浅野幸治

エピソード

効率よりも面子

ユダヤとアメリカの合併会社の指導に当たっていたロバート・ベイランは、その経験から異文化の人々との働き方について多くのことを学んでいた。ロバートがそれらのことについて考えていた時、部下のユダヤ人とアメリカ人が二人で作成した合同報告書を持って入ってきた。ロバートは書類を受け取り、二人に、報告書は二時間ほどで読み終わるだろうからその頃もう一度来てくれるようにと言った。

二人が戻ってきた時、ロバートはユダヤ人の部下に向かって、報告書は非常に良かったと言った。ただし、報告書には「付け加える」べき点がいくつかあった。それに結局書き直す必要があったので、ロバートが少し変えて欲しいと思う点も一つ二つあった。

ユダヤ人の部下が部屋を出ていった後で、アメリカ人の部下はロバートに意見を述べて、何故あのユダヤ人にそんなに甘くして報告書のずさんさについて文句を言わないのかと尋ねた。報告書の中でユダヤ人の担当部分がきちんとできていなかったことは明らかであり、当然ロバートはユダヤ人を叱責すべきであった、と感じたからである。それに対してロバートは、余りきつくしないのが一番だと思うと答えて、アメリカ人の部下に、その理由は時間がたてば解るようになるだろうと諭した。

何故ロバートは、ユダヤ人の部下を叱責するのは賢明ではないと考えたのか。

エピソードの解説

よそ者でも悪意のない質問は受け入れられる

地中海ユダヤ人は、（アメリカ人から見れば）批判に対して過敏な傾向がある。だから地中海ユダヤ人の労働者も、批判的な言葉に対しては、どんなに些細なものであっても一大攻撃であるかのように反応しがちである。ユダヤ人は自我が内輪仲

間との関係を中心としているため傷つき易く、批判を余り歓迎しない。ロバートは地中海ユダヤ人の部下との関係を育てていく必要があったので、まず最初に部下を褒め、その後で「付け加え」を求めたのは全く賢明であった。

福音書伝承の中には何回か、イエスが悪意がないと見られる質問を受けて、それに対して支援と激励をもって答える場面がある。

イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない。『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。(マルコ10・17-22)

彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。」イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは神の国から遠くない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。(マルコ12・28-34。マタイ22・34-40ではイエスが律法学者に肯定的な評価をしたことが省略されている。)

注意してもらいたいのは、これらどちらの場合も、質問した人は敵意があるとは述べられていない点である。イエスは、質問した人との関係を発展させていく可能性を残している場合の立派な人にふさわしい仕方で答えている。参考までに、次のように質問した人が敵意があると述べられているのに、イエスがそれを気に留めない場合もある。これは福音書の中では極めて異例のことである。

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。

「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」（ルカ10・25-28）

(あさの・こうじ)

イエスの世界

古代ユダヤへのタイムトラベル 第9回

著＝ブルース・マリーナ ◆ 訳＝浅野幸治

エピソード

かけがえのない人間になる

アメリカ人の管理職が、会社のある部門の新しい責任者としてヘブロンに赴任してきた。アメリカ人は、現地の社員を教育するために、まずユダヤ人の管理職を教育することが重要だと考えていた。何人かの管理職を研修のためにアメリカに派遣しようとも思っていた。そこで部下の一人にこの考えを話したところ、次のような話を聞かされた。

ヘロデ王の軍隊にユダヤ人の百人隊長がいたが、その百人隊長は注文コードを施錠して隠していたので、他の者には兵站部隊にサンダルを注文することができなかった。百人隊長は、常にサンダルの注文に追われていたし、実際それは百人隊長一人には大変過ぎる作業であった。そこで部下の一人が百人隊長に、「どうして誰かに手伝ってもらわないのですか」と尋ねた。それに答えて百人隊長は、「ばかなことを言うな。そんなことをしたら、そのとたんに俺はもう必要でなくなってお払い箱になってしまう」と言った。

アメリカ人の管理職は、この話の意味をどう理解したらいいのかよく解らなかったので、ほとんど気に留めなかった。しかし一年後、アメリカ人はこの話についてもっとよく考えなかったことを後悔した。

何故、ユダヤ人の百人隊長はサンダルの注文を手伝ってくれる人を求めなかったのか。

エピソードの解説

そのために必要な対策を講じる

地中海ユダヤ人の労働者は、自らをかけがえのない人間と見る、あるいは少なくともかけがえのない人間になろうと努める傾向がある。もしユダヤ人の百人隊長が

部下に助けを求めたら、それは百人隊長は補充が利くということ認めるのに等しい（「そんなことをしたら、そのとたん俺はもう必要でなくなって……」）。言うまでもなくこれは、「誰一人として絶対必要な人員はいない」というアメリカで支配的な考え方とは正反対である。

ところで、ユダヤ人の労働者の、自らをかけがえのない人間と考えるこの傾向は、すべての社会階級において見られるものである。その理由は、社会についての支配的なモデルが家族であり、家族では生まれてきた子供はそれだけで内輪の者からかけがえのない人間と見られるからである。一般的に家族は、自分たちの家族が一人でも減っていたり別の人間が加わっていたりする姿を想像することができない。親は、理想の家族にするためにこの子供を捨てようとかあの子供を捨てようなどとは考えない。家族の者はみな、自分たちが同じ家族の中に生まれてきたというそれだけの理由で紛れもなく同じ内輪に属すと考えるようになっている。

あるいは別の言い方をすれば、地中海社会のように人間関係の緊密な社会では、社会関係を説明するのに有機体のモデルや比喩が最適と見られるが、それは社会関係が本質的にすべて生殖、誕生、成長、血縁関係などの有機的プロセスに根ざしているからである。ちょうど母親や父親、長男や末っ子（男子）の役割、男女の役割一般が与えられたもので変更不可能なように、他の社会的役割の場合も同様なのである。村の白痴や予言者にも社会組織の中に居場所があるのは、私の母や父や兄弟に劣らずかけがえのない人間だからである。

パウロがキリストと教会について説明する時、自然とそのような有機体モデルを使用して、すべての人をかけがえのない人間と見ていることに注意してもらいたい。

賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなされるのは同じ神です。一人一人に「霊」の働きが現れるのは、全体の益となるためです。ある人には「霊」によって知恵の言葉、ある人には同じ「霊」によって知識の言葉が与えられ、ある人にはその同じ「霊」によって信仰、ある人にはこの唯一の「霊」によって病気をいやす力、ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。――

中略——

体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし体全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか。そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。わたしたちは、体の中でほかよりも格好が悪いと思われる部分を覆って、もっと格好よくしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとし、見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいつそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。皆が病気をいやす賜物を持っているだろうか。皆が異言を語るだろうか。皆がそれを解釈するだろうか。（一コリント12・4-30）

この有機体として見られた教会の中では、すべての人が現実にかげがえのない存在になっている。また人がかけがえのないものだというこの感じ方は、ものが有限であることの理解に根ざしている。人に社会的に与えられた役割、人が他の人に助

けてもらって獲得する役割は——人は他の人に助けてもらってその役割に文字通り「成長していく」のである——有限な社会的役割のその人の取り分に他ならない。自分の役割をやめたり放棄したりすることは、社会に穴をあけることであり、自分と関係するすべての人に迷惑をかけることになる。家族の死にどう対処するかは、社会組織の中にできた穴にどう対応するかという問題に他ならない。

現代の世界では、ものは原則として無限に供給があると思われている。もし何か不足していれば、もっと生産すればよいのである。誰かが何かをより多く手に入れたとしても、直ちに別の誰かの取り分が少なくなるというわけではなく、工場が時間外操業をして生産量が大きくなったというだけのことかもしれない。この観点からすれば、いかなるものも有限ではなく、人もまた容易に補充できる。誰一人として絶対必要な人員ではない。しかし古代の地中海世界では、考え方が全く別である。あらゆるものは、供給に限りがあると思われていた。これには、物質的なものだけではなく社会的役割、子孫、更に面子、友情、愛、権力、社会保障、地位など人生のありとあらゆるものが含まれた。ものの全体量が大きくなることはあり得ず、自分たちの地域内にある土地と同様、分配できるものは一定量しかなかった。従って、誰かの取り分が増えることは、自動的に別の誰かの取り分が減ることを意味した。

かくして立派な男は、自分の正当な取り分に対してのみ権利を主張し、それ以上を手に入れよう、即ち人のものを横取りしようとは考えなかった。が、すべての立派な男には現実に、ある正当な取り分があった。そして社会組織の中で立派な男の正当な取り分とは社会的役割であり、それは決して取り去ることができなかった。

職業と能力の観点からは、もし地中海のユダヤ人が現実に自分に取って代わることのできる部下に助けを求めたとしたら、それは自分が部下で補充できること、恐らく自分の役割に実際に属するのが部下であること、即ち自分の役割が奪われることを認めるのに等しかった。

他方、身分は人の生まれに基づくものなので、高い身分の人は低い身分の人に助けを求めても、身分を脅かされることはない。低い身分の人が高い身分の人に取って代わることはあり得なかったからである。雇用主は、労働者を募って働かせても身分を失わないが、労働者は、依頼されるべきであり自分から仕事を求めてはいかない（マタイ20・1-16を参照）。更に、イエスが律法に基づいた行動に関して「～は、律法で許されていますか」という質問を受ける際には、質問をした人はみ

なイエスを試している。その理由は、質問をした人はもし本気であればイエスを律法解釈の権威として、従って自らのかけがえのない地位を脅かす者として認めていることになるからである。だからイエスは常に試されているのである。

すると、片手の萎えた人がいた。人々はイエスを訴えようと思って、「安息日に病気を治すのは、律法で許されていますか」と尋ねた。（マタイ12・10）

ファリサイ派の人々が近寄り、イエスを試そうとして、「何か理由があれば、夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と言った。

（マタイ19・3、マルコ10・2も参照）

それから、ファリサイ派の人々は出て行って、どのようにしてイエスの言葉じりをとらえて、罠にかけようかと相談した。そして、その弟子たちをヘロデ派の人々と一緒にイエスのところに遣わして尋ねさせた。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てなさらないからです。ところで、どうお思いでしょうか、お教えてください。皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。」（マタイ22・15-17、マルコ12・13-14およびルカ20・20-22も参照）

最後に、低い身分の人は、何を失う心配もなく、いつでも高い身分の人に物事を頼むことができる。社会の中のこの行動が、祈りの根本にある。人は、自分の社会の中であって自分の社会的存在を支配している高い身分の人に頼み事をして祈ると同じ仕方で神にも祈りを捧げる。例えば地中海のユダヤ人社会の中では、たいいていの人にとって最も重要な高い身分の人とは、敬意と引き替えに不幸な低い身分の者を特別に庇護してくれる人である。労働者を雇う主人のたとえの中で（マタイ20・1-15）、もし主人が労働者と一定の庇護関係にあったなら、そうでなかった場合よりもっと多くの賃金を払ってくれていただろう。このたとえの中で問題にされているのは、不平を言った労働者の受け取った賃金がたとえ公正な額であっても庇護関係に基づいた額ではなかったという点である。それだから、神のことを「父」と呼ぶのは、「庇護してくださる方」と呼ぶのと同じことであり、神を「父」と呼んで祈るのは、「庇護してくださる方」と呼んで祈るのと同じことなのである。

(あさの・こうじ)

イエスの世界

古代ユダヤへのタイムトラベル 第10回

著＝ブルース・マリーナ ◆ 訳＝浅野幸治

エピソード

かけがえのない人間になる（その2）

アメリカ海軍は、ユダヤ海軍の将校を始めとした軍人の教育に協力することがしばしばある。従って、両海軍の間には緊密な意思疎通が必要とされる。ところが、一つの問題が頻発しているように思われた。例えばアメリカ軍が何らかの情報を報告書や計画書などの形で持っていて、それをユダヤ海軍の軍人多数に配布してもらいたいと思うとしよう。アメリカ軍は、その情報をしかるべき筋に伝える。しかし、その情報がそれを受け取った最初の将校より先には伝達されないことがしばしばある。アメリカ人の多くはこのことに非常に狼狽させられる。

明らかに、情報を受け取った最初のユダヤ軍将校が情報を自分の所で止めたのである。では何故、情報を最初に得た人がそれを他の者から隠しておくのか。

エピソードの解説

そのために必要な対策を講じる（その2）

情報を最初に得た将校は、自分だけがその情報を持つことによって、自分の権力、地位および自尊心を高めることができる。情報を他の者から隠しておけば、将校は、その情報を自分の自由にできる。そして情報を自分のものにした将校は、海軍の中で他の者には手に入らないものを所有することになる。言い換えれば、将校は、海軍内での権力および相対的地位が高まる。

ほとんどの地中海ユダヤ人はお互いによそ者である。これは、同じ組織の中で昇進を競い合う者同士の場合にも妥当する。ゼベダイの二人の息子（同じ家族の内輪同士）が、他の弟子たち（この場合、二人の息子にとってはよそ者）と競争してイエスに自分たちを上にしてくれるよう求めたことを考えてみる。

ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願

いすることをかなえていただきたいのですが。」イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。」ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。(マルコ 10・35-41)

(マタイ 20・20-28にも同じ話があるが、イエスに願いを述べるのはヤコブとヨハネの母である。ルカにはこの出来事は記録されていない。)

神から啓示を受けた人がその内容を自分だけのものにしておく場合も、社会の中で他の者には手に入らないものを所有することになる。言い換えれば、知を持った預言者は、社会内での権力および相対的地位が高まる。その好例と思われるのは、ガラテア書 1・11-24で述べられるパウロの地位である。パウロは自分が受け取った啓示を誰にも知らせずについて、かなり後になってから自らの召命と信じる宣教活動を始め(それは三年後のことである、ガラテア 1・18)。パウロのその他の啓示経験についても同様で、隠しておく方が教会内で自分の利益になるので、パウロは啓示の内容を人に明かさない。

わたしは誇らずにいられません。誇っても無益ですが、主が見せてくださった事と啓示してくださった事について語りましょう。わたしは、キリストに結ばれていた一人の人を知っていますが、その人は十四年前、第三の天にまで引き上げられたのです。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。わたしはそのような人を知っています。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。彼は楽園にまで引き上げられ、人が口にするのを許されない、言い表しえない言葉を耳にしたのです。このような人のことをわたしは誇りましょう。しかし、自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません。(二コリント 12・1-5)

ここで秘密の保持が重要になる。情報を独占し他の人から隠しておく者は、その情報を自分の自由にでき、それと関わりのある他の人をも支配できるからである。福音書の伝承では、ペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人が、イエスがモーセやエリヤ、律法や旧約の預言者よりも優れていることを示す出来事、即ちイエスの変容の証人であった。三人は、マルコ書とマタイ書の中で、その出来事を誰にも明かしてはいけないとイエスから言われる。

一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。(マルコ9・9-10)

一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない」と弟子たちに命じられた。(マタイ17・9)

但しルカ書では「その声がしたとき、そこにはイエスだけがおられた。弟子たちは沈黙を守り、見たことを当時だれにも話さなかった」(ルカ9・36)とあり、三人が秘密を保持したこと(ルカ書の他の部分における三人の特別な地位を説明してくれる事柄)は彼ら自身の考えであったと思われる。更に、マタイ書においてペトロが(一人で、またはヤコブやヨハネと一緒に)実に多くの啓示を受けていることにも注意する。神からの新しい情報を自分のものに行っていることも、ペトロが教会の指導者たるべき一つの理由になっている。

(あさの・こうじ)

イエスの世界

古代ユダヤへのタイムトラベル 第11回

著＝ブルース・マリーナ ◆ 訳＝浅野幸治

エピソード

地中海時間は異なる

ルイス・ランスは、兄のレスが長年暮らしている一世紀のパレスチナに初めてやって来た時、レスとたくさんの時間を一緒に過ごした。ある日の午後、二人がレスの会社でゆっくり共同の仕事について話をしていた時、レスのユダヤ人の部下が書き上げた報告書を持って入ってきた。レスは、週末にパーティをするのを思い出したので、部下に安息日が終わり日没になったらぜひ自分の家に来てくれるようにと言った。すると部下は丁寧に答えて「はい、喜んで。でも地中海時間ですか、それともアメリカ時間ですか」と言った。レスは笑って「地中海時間だよ」と答えた。だが、ルイスには、何のことを話しているのかよく解らなかった。

「地中海時間」という言葉は、何を意味するのか。

エピソードの解説

新約聖書の中では、出来事は常に「時間通り」に起こる

アメリカの基準からすれば、地中海ユダヤ人の時間に対する姿勢は、非常に「いかげん」である。一世紀の地中海地域では、日付や時間を正確に計ることができなかった。一般的な傾向として、アメリカ人は「時間に正確である」ことに特別の価値を置く。アメリカ人にとっては、時計の針が現在を指し示し、それ以外はすべて過去か未来である。しかし地中海ユダヤ人は、「時間の正確さ」をそれほど重要なこととは考えない。地中海ユダヤ人の現在とは、位の高い人物の在位や重要な出来事の展開によって定まる一定の期間である。従って上のエピソードの場合、問題の時間は、地中海時間では「安息日が終わって日が暮れた後のいつか」を意味する。アメリカ時間では「午後およそ九時〇分」である。

聖書の次の箇所を考えてみよう。

気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。それは、ちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているようにと、言いつけておくようなものだ。だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、あなたがたには分からないからである。主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけるかもしれない。あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。（マルコ13・33-37）

ここで一日のより細かな区切りとして挙げられているのは、夕方、夜中、鶏の鳴くころ、明け方である。更に紛らわしいことに、ユダヤ人とギリシア人の計り方では、新しい一日は日没から始まったが、ローマ人は夜中から新しい一日が始まると考えた。（「目を覚ましていなさい」というすべてのたとえの場合と同様）ここでもまた、正確な時とは、重要な人物、今のたとえの中では旅に出た主人が姿を現す時である。主人が帰って来る時こそ、家で僕たちが主人を迎える用意ができていべき時なのである。

同じたとえのルカによる記述について考えてみよう。

腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。主人が婚宴から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言うておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。主人が二更（真夜中）に帰っても、三更（夜明け）に帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。（ルカ12・35-38）

ルカは夜の時間を表すのに、都市部で用いられたローマの更時間を使って、「二更」「三更」という言い方をしている。重要な点はここでも、正確な時とは重要な人物が姿を現す時であって、何らかの物質的な針によって決定されるものではないということである。

（あさの・こうじ）

イエスの世界

古代ユダヤへのタイムトラベル 第12回（最終回）

著＝ブルース・マリーナ ◆ 訳＝浅野幸治

エピソード

時計なしの時間

一世紀のパレスチナでは、アメリカ軍とローマ軍が共同で行うプロジェクトが数多くある。両軍の関係は概ね良好である。しかし時折、誤解の生じることもある。例えば毎年、ローマ陸軍でユダヤ人訓練兵が教育を終了する時、その卒業式にアメリカ人も出席する。ところが今年は、アメリカ人の側では卒業式がいつ行われる予定なのかよく解らなかつた。アメリカ人が金曜日に招待状を受け取った時には、卒業式はわずか二日後の日曜日に予定されていた。言うまでもなくアメリカ人の多くは、週末の予定を変更せざるを得なくなり非常に困った。明らかに、ローマ・ユダヤ軍の関係者が招待状を発送するのが非常に遅かつた（つまりアメリカの基準で見て「遅かつた」）のである。

ローマ・ユダヤ人の側の明らかな遅れは、どう説明したらよいか。

エピソードの解説

新約聖書の登場人物の見方では、将に起こらんとしていることは現在に根ざしている

一般的な傾向として、時間と計画についてのローマ・ユダヤ人の考え方は、アメリカ人とは大いに異なる。何千年もの間、地中海地域の人々は総じて周到な計画を立てるのが苦手であつた——そのような計画に必要な未来志向は、現在の必要事がすべて十分に満たされている社会でのみあり得るからである。比較的最近になるまでは、地中海地域の人はそのような豊かな状況を一度も享受しなかつた。地中海の経済はずっと最低限の経済であつて、決して豊かな経済ではなかつた。更に、計画も普通は、略奪、戦争、中央政権への反乱などによって挫かれ、現在を一層不確実なものにした。その結果、地中海ユダヤ人の勤労行動はほとんどが行き当たりばったりなものに見える。細部への注意や細心の計画性といったものは、地中海ユダヤ人

の行動にはほとんど見られない特徴である。更に時間の予測は不正確になりがちであり、仕事の完成に実際にどれだけの時間がかかるかということにはほとんど関心がない。にも拘わらず、多くの仕事が、純粋な熱意と義務感によって成し遂げられるのである。

地中海文化の現在志向を知るために、イエスが引いている、現在にのみ注意を向けたことわざを考えてみよう。「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である」（マタイ6・34）。また、イエスが現在において、つまり自分の周りの人が生きている間に、神から力を与えられると信じていたことにも注意してもらいたい。「はっきり言っておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国が力にあふれて現れるのを見るまでは、決して死なない者がいる」（マルコ9・1、マタイ16・28、ルカ9・27）。

アメリカ人と違って、地中海ユダヤ人は計画の厳密な遵守がそれほど重要だとは感じない。アメリカ人にとっては大抵、重要なのは未来であるが、地中海地域の人にとっては現在である。地中海社会は現在志向型であるが、現在が何らかの破綻を来しその説明を求めようとする際には、人々は過去に目を向ける。人間の本性は常に同じであるから、現在を説明するのに過去に目を向けることができるのである。地中海地域の人が、現在の問題の解決を求めて、未来に目を向けることはまずない。

第一の特徴、即ち計画が重要でないことは、福音書の伝承の中にイエスのメシアとしての力が「この世代が亡くなる前に」現れることを主張する数々の言葉があるにも拘わらず、端的に言ってそのような力の到来は決して起こらなかったという事実の内に確認することができる。メシアの到来を見ることができなかつた人々の気持ちは、エマオに行く弟子たちの様子に示されている（ルカ24・15-21を参照）。では、実際の出来事を新約聖書がどう説明しているかという、イエスが神により召されたことはイエスがメシアであることを疑いの余地なく証明するが、力にあふれたメシア、実効のあるメシアとしてはまだ現れていない、というものである。例えば、使徒行伝におけるペトロの説教の中には次のように述べられている。

だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。こうして、主のもとから慰めの時が訪れ、主はあなたがたのために前もって決めておられた、メシアであるイエスを遣わしてくださるのです。このイエスは、神が聖なる預言者たちの口を通して昔から語られた、万物が新し

くなるその時まで、必ず天にとどまることになっています。（使徒行伝 3・19-21）

そしてパウロは、「ローマの信徒への手紙」の初めに「御子に関する福音」について次のように初期キリスト教の聖歌を引用する。

御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。（ローマ1・3-4）

明らかに、イエスがメシアとしての力を振るうのは、（未来ではなく）将に起こらんとしていることであった。福音書の伝承もそのことは次のように述べている。

また、イエスは言われた。「はっきり言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国が力にあふれて現れるのを見るまでは、決して死なない者がいる。」（マルコ9・1）

マタイとルカの記述は少し異なるが、すべて要点は同じ、力にあふれた神の国は「この世代が」亡くなる前に今将に現れようとしているということである。

はっきり言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、人の子がその国と共に来るのを見るまでは、決して死なない者がいる。（マタイ16・28）
確かに言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国を見るまでは決して死なない者がいる。（ルカ9・27）

だからこの伝承では、「神の国が力にあふれて現れるのを見る」こと、「人の子がその国と共に来るのを見る」こと、「神の国を見る」ことは、すべて全く同じ意味である。ここで大事な点は、福音書の伝承によればイエスは、当時の人が少なくとも何人かは神の国の到来を現に目にするだろうと思っていたということである。けれども、期待された出来事は起こらなかった。このような帰結になっても、地中海地域の人々は「虎穴に入らずんば虎兇を得ず」の精神を持っており、決してくじけることがなかった。「黙示録」の預言者も、イエスを殺した者どもがまもなく力にあふれたイエスを目にするだろうと信じていた。

見よ、その方が雲に乗って来られる。
すべての人の目が彼を仰ぎ見る、
ことに、彼を突き刺した者どもは。
地上の諸民族は皆、彼のために嘆き悲しむ。
然り、アーメン。（黙示1・7）

伝統的に、神のみが未来を知る。イエスが力にあふれたメシアとして到来することが、将に起こらんとしていることがらではないと解った時、それは神に委ねられ、現在志向型の人々にとって日々の関心事ではなくなった。

その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。（マルコ13・32）
その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。（マタイ24・36）
さて、使徒たちは集まって、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねた。イエスは言われた。「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。」（使徒行伝1・6-7）

更に、現在が何らかの破綻を来し、危機解決の望みがほとんど見られない時、人々は、現在において将に起こらんとしていることを知るために、聖書（過去）を調べることができる。つまり、未来に目を向けるのではなく、今起こっていることを知るために過去に目を向けるのである。

十九世紀ヨーロッパの神学者が「終末論」とか「黙示録的」と呼んだ聖書の箇所は、イエスの到来の遅れや初期教会内部の失望を述べているのではない。実際には「この世の終わり」に関する箇所は、過去、即ちイスラエルの聖書からの引用で成り立っているが、それは現在を明らかにするためにある。そのような箇所で、視野の中心にあるのは、現在である。これは、聖書記者が現時点で将に起こらんとしていること、現時点で既に起こりつつあることを明らかにするために過去の聖書を調べる場合も、同様である。

現在とその継続的影響の重視は、既に実現したイエスの経歴、即ち預言者・治癒者としての経歴に基づいてイエスに従う人々の場合に見られる。またそれとは別

に、將に起こらんとしていること、即ちイエスの経歴の「未完了の部分」、力にあふれたメシアとしての役割を強調する人々もいた。しかし、將に起こらんとしているイエスの役割、力にあふれたメシアたるべく神が定めた者としての役割が、イエスの預言者・治癒者としての経歴を覆い隠すようなことがあつてはならない。現在志向の人間にとっては、このイエスの経歴の將に起こらんとしている部分が正確にいつ起こるのかは、さほど現実的な問題にはならない。実際のところ、その時は未来であっても（！）構わないのだ。

これが福音書に見られるものの見方である。これらの書は、力にあふれたイエスの到来が將に起こらんとしていることだとはもはや信じないキリスト教共同体の中でまとめられた。イエスの到来は、神のみぞ知る未来の出来事であり、神に委ねられたのである。では、我々の現在はどうなるのか。福音書には、イエスが地中海文化の現在志向を非常によく表した、次のことわざを引いたことが記されている。

「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」（マタイ6・34）この現在志向に基づいて、福音書は、イエスのこれまでの経歴に基づいてイエスに従う人々に様々な助言を与えている。マタイでは、山上の垂訓の中で一連の教えが述べられ、また様々な規則がキリスト教共同体に与えられている。マルコでは、現在の弟子が苦しみを受けること、それが勝利への道であることが説明されている。そしてルカでは、キリスト教がイエスに起源を發し、ペトロや特にパウロのような宣教者によってエルサレムから各地に広まっていったことが説明されている。

パウロの手紙にも、方向転換がある。「テサロニケの信徒への手紙一」では、イエスが力にあふれた主として到来することは、皇帝の訪問を意味する「パルーシア（来られる）」（一テサロニケ5・23）という言葉で述べられ、將に起こらんとしている出来事と見られているが、「コリントの信徒への手紙一」およびその後の手紙では、この希望は姿を消し、現在のキリスト教共同体の行動の問題に関心が移っている。パウロにとって重要なのは、これまでのイエスの経歴における最後の部分、即ち不名誉に処刑された後イエスが死者のうちからよみがえったこと、そしてこの復活の意味であった。

ともかく、福音書の共同体にとってもパウロにとっても、既に実現したイエスの経歴に基づいて人々はイエスに従うべきなのであって、まだ実現していないことに基づいてではなかった。

(あさの・こうじ)